
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 139 号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2004.07.29 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1600 部*****

□ 目 次 □-----

<今週の提言>食べ物の記憶 安富六郎

<読者の声>松山さんから

<旬を食べる一野良からの便り・6> “枝豆 (畑のエメラルド)” 小泉浩郎

<山崎農業研究所情報>

◇山崎記念農業賞・記念フォーラム (2004年7月3日) 講演要旨 (速報)

一国民の森林づくり: その目的と技法を問う一

【その2】自然の摂理に学んだ新聞伐・育林法

鋸谷 茂 (受賞者・福井県坂井農林総合事務所林業部)

<79歳の意見>

死んだ人に励まされて (『千の風になって』詩のショック) 原田 勉

<日本たまご事情>

鳥インフルエンザ 中国 ヴェトナム タイ で再発 愛鶏園・齋藤富士雄

<弱視の人に明るい情報>大活字に助けられて 原田 勉

<農文協ニュース>「田舎の本屋さん」がリニューアル (2004/7/22)

<農文協図書館情報> (7/29 更新予定) 農文協図書館・原田太郎

<編集後記・同人の近況報告> 7月15日~7月29日

<今週の提言>食べ物の記憶

1941年 (昭和16) に太平洋戦争が始まる。当時私は小学校低学年であった。急速に食料品が乏しくなり、「うまい」ものなどとても手に入らなくなる。牛乳はそれ以前から貴重であったが、日常食である納豆も次第に得難くなり、芋の混入したニセものも現われるようになった。そうしたなかで私が発明したのが“納豆牛乳メシ”であった。牛乳に醤油で味付けた納豆を混ぜ、ご飯にかけて食べる。なんとうまかったことか――

今 72 歳の私は最近、ふとこのことを思い出して、同じメニューの再現を試みてみた。60 年以上前の記憶が鮮明に蘇ってきた。やっぱり「うまい」のである。味覚の記憶は脳裏に深く刻み込まれたのであろうか。幼いときの体験は将来長く失われないと言われるが、私の場合には確かにそうであった。いや、食の習慣というのは本来そのようなものなのだろう。

戦後、日本はアメリカの占領下にあつて食料援助をうけた。脱脂粉乳やコムギ粉などが輸入された。パン食は頭を良くするというパン食礼賛のおすみつき宣伝も聞いた。発育盛りの子どもに良いとなれば、パンは小学校の給食には欠かせないことになる。これこそアメリカの百年先を見た農業政策であったと私は感じている。

現在、孫が通う小学校の給食メニューをみると、昼食の約 50%が米、残りの 50%がパン食である。子どもはパン食を好む。将来、この影響が強く現われるであろうことは、今の中高年の米離れからみてもほぼ確実だろう。米が生産過剰にもかかわらず、なぜ米食をもっと増やさないのか。自国産の米を給食に取り入れることは、わが国の食料主権回復の第一歩になる。そして、食料主権の回復は、単に食料自給率の問題にとどまらず、子どもたちの人間性や家族のあり方と食との関係を問い直すことにもつながるはずだ。

安富 六郎
山崎農業研究所会員、土地利用学
y.noken@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●07/26 松山善之助さんから：今、山村は獣害で急変している。

奥美濃の岐阜県加茂郡七宗町にUターンして農業を始めた。名古屋へも 2 時間と近く知られていない自然景観の良さ（とくに溪谷、溪流）、源流を持つ森林資源、棚田を生かした新たな観光要素を取り込んだ農業形態を起こしたい。

ところが、地球温暖化によると考えられる障害が激しい。猪が激増。一説に

は猪豚が逃亡し猪と交雑して繁殖力が5倍になったという。現実に捕獲猪を集めて飼育し猪鍋を名物にして販売する人の意見は交雑した猪肉は軟らかく美味しいという。従来この地域には生息しなかった鹿が襲来し始めた。これは温暖化により北上してきたものと推定する。猪とともに暖地性の獣である。

従来いなかった猿が農作物を荒らす。従来、生息しなかった「ハクビシン」が急増、農作物全般をお先に失敬する。カラスが空から農作物をねらう。これだけを総合防除して営農し、販売利益を出すことはまずできない。10万円の売り上げのために50万円の投資はきつい話である。今、ここでの農業の担い手は超高齢者による野菜栽培、営農組合による稲作である。ここに来て、旧来の農業にもっとも熱心に取り組む超高齢農業者、若干の定年営農者、新たな農業形態を目指す定年U-ターン者もまれにいるが獣害で途方に暮れている。

猪は電柵でいいが、鹿は1.5m以下は飛び越える。猿は電柵、1.5m以上も乗り越える。ハクビシンは電柵をすり抜ける。

獣との知恵比べに勝つ方法を教えて頂きたい。

Z e n 健康研究所 山村振興研究所主宰 松山 善之助

<旬を食べる―野良からの便り・6> “枝豆（畑のエメラルド）”

たまたま、テレビをつけたら「NHKためしてガッテン」で究極の枝豆のゆで方を放映。そのコツは、莢の両端を1mmほど缺で切り、塩もみする。塩分4%（水1リットルに塩40g）の熱湯に入れ3分30秒前後茹でる。取り出してうちわで扇ぎで出来上がり。さらに、日本茶のティーパックを入れて茹でると普通の枝豆が銘柄品新潟茶豆に近い風味がでるといふ。今宵のビールに試してみても如何。

枝豆は、枝についた莢をもぎ取り、その場で茹でるから枝豆という。冷凍枝豆のように莢で流通しているものは、正確には莢豆と呼ぶべきだろう。本当の枝豆なら国産であることは間違いない。手間はかかるが、枝つきが美味しい。

美味しい枝豆の代表は、新潟の茶豆、山形のダダチャ豆だ。履歴をたどれば兄弟らしい。この老舗に対して名を挙げつつあるのが、京都の紫頭巾である。

黒大豆の枝豆だ。季節になると沿道に採り立ての直売所が並ぶ。黒大豆の枝豆ならこちらが本場というのが、丹波篠山の枝豆。10月中旬から下旬、季節限定で産地直送がある。普通の枝豆は、早採りでも熟しすぎても駄目、収穫適期は3日といわれるが、この枝豆は葉が枯れる直前、10月中下旬、しっかり熟してからの収穫、実は丸々としている。

枝豆も外国からの輸入攻勢にさらされている。ビールのつまみに年中出でくが、旬以外の冷凍品は殆ど輸入品である。残留農薬は大丈夫か。遺伝子組換え大豆は入ってこないか。心配しながらのビールでは、酔いも半減する。

参考リンク：NHKためしてガッテン

：2004年7月14日放送：枝豆！あなたのゆで方は間違っていた

<http://www.nhk.or.jp/gatten/archive/2004q3/20040714.html>

小泉 浩郎

山崎農業研究所事務局長

y.noken@taiyo-c.co.jp

<山崎農業研究所情報>

◇山崎記念農業賞・記念フォーラム（2004年7月3日）講演要旨（速報）

—国民の森林づくり：その目的と技法を問う—

【その2】自然の摂理に学んだ間伐・育林法

鋸谷 茂氏（受賞者・福井県坂井農林総合事務所林業部）

造林は戦後、戦災消失住宅の復旧のために行われ、わが国始まって以来の大事業である。木材は使いやすく安価であった。1945～65年（昭20～40）には林業は儲かった。林業のバブル時代であった。奥多摩の林業も盛んであった。都会では住宅資材に不足していたのでよく売れた。従来の方法では造林の経済効率を最大にするために間伐を行なう。

木はぎりぎりの状態で成長し、適当な時期（経済性の最高のところ）で伐採、出荷される。このような管理システムがいまも存在している。このシステムには多くの手がかかり、これが林業の行き詰まりの理由の一つになっている。一定時期の間伐は生育に必要である。いま時期を逸した森林が増えている。径20

cm までは間伐可能であるが、樹木が大きくなりすぎると間伐できない。

そこで、風雪に強いような間伐方法として木の太さと高さの比率が大きくなったものは立枯れさせる方法（巻き枯し法）を考えた。また伐採できるものは切り倒したまま、災害を起こさないようにしておく。間伐材はもったいないと思うかも知れないが、山から出さなくては利用されない。林内の地面に植生が無くなると間伐が必要。植生の多様化が動物による被害を防ぐことになる。現在では森の生態系が狂ってきて、動物も偏って増えている。肉食動物がいないので、バランスが崩れている。森林の密度管理をよく行えば、生態系の復元も可能である。

現在、わが国の木材のみではよい家は建てられない。理由は生育の年齢が若すぎると、よい柱がとれない。丈夫な梁がとれない。よい家にはどうしても太い木が必要になる。少なくとも径 60cm の木が必要であり、このような木材は再利用できる。太い木の成育には 120 年～150 年かかるとされてきたが、大きい木材が供給できるようになればよい。このため、経済効率はよくないがそのための間伐が必要である。

100 本から 10 本の木が育てればよいと考える。間伐方法を工夫すれば同じ太さに木を 85 年で造れる。特定の地域から目的の材は輸入できるが、自給を可能にしたい。1000ha の人工林を育成した先祖は自分の時代にその結果を望んだのではないように、われわれも子孫のために自然豊かな林を残したい。

（文責：安富）

<79 歳の意見> 死んだ人に励まされて（『千の風になって』詩のショック）

編集同人の松坂正次郎さんにこの詩を教えられて大きなショックを受けた。

私たちは、「故人を偲ぶ会」に参加して故人の業績を讃え、別れを惜しみ嘆く、そして最後に「安らかにお眠りください」と言ってきた。こうした私たちの故人を偲ぶ習慣を当たり前と想ってきていた。

ところが、この詩は、私たちと全く異なる思想・信条を提起している。私は初めて読んでショックを受け、何日も考え込んでしまった。

『千の風になって』の詩は、英語の原作詩者は不明といわれ、日本語詩は新井満が訳し絵本（絵・佐竹美保）にした。わずか 12 行の詩は次の通りである。

(▼新井氏の訳詩は、曲が付いてCDにもなっていて日本音楽著作権協会管理下にあり、その方針で、歌詞は全てメルマガには一部でも掲載できないため、許諾を得た以下の新井満さんのページで是非ご覧ください)

http://www.twin.ne.jp/~m_nacht/1000wind/1000wind.html

CDは、ポニーキャニオン「新井満「千の風になって〜再生〜」

<http://www.ponycanyon.co.jp/wtne/cdj/pcca02020.html>

で試聴できる。

詳しくはこの絵本（理論社刊 2004.3 1300円＋税）をご覧ください。

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=04014224>

この絵本より前に出された講談社版の写真詩集『千の風になって』

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=03056435>

には以下のような14行になる別訳も掲載されている。

---引用開始---

私のお墓の前に立って涙を流さないでください

私はそこにいません

眠ってなんかいません

私は千の風になって吹きぬけています

--以下略-----

絵本には、新井満さんの推理によってアメリカ先住民族の伝承が物語りとなって表現されている。すでに欧米では有名な詩であり、アメリカの9・11テロの追悼集会でも11歳の遺児が詠んだということも紹介されている。

私はこの詩を詠んで59年前に亡くなった多くの戦災者のことを思い出した。1945年の東京大空襲で亡くなった10万人、沖縄戦で30万人、ヒロシマの原爆で15万人、ナガサキの原爆で8万人の死者のことを思い出した。

これらの人々の心はまだ死んでいない。千や万の風になって世界の天空を駆け巡って私たちの訴えているのだと思っている。原詩を紹介したい。

A THOUSAND WINDS

Do not stand at my grave and weep,
I am not there, I do not sleep.

I am a thousand winds that blow;
I am the diamond glints on snow,
I am the sunlight on ripened grain;
I am the gentle autumn's rain.

When you awake in the morning bush,
I am the swift uplifting rush
Of quiet in circled flight.
I am the soft star that shines at night.

Do not stand at my grave and cry.
I am not there; I did not die.

Author Unknown (作者不詳)

私は、死んだ人に励まされ、これからも忘れずに生きて行かねばと思った。

★参考リンク：新井満ホームページ「マンダーランド通信」

http://www.twin.ne.jp/~m_nacht/

から、■「千の風になって」詳細（映画化もされています。）

http://www.twin.ne.jp/~m_nacht/1000wind/1000wind.html

http://www.twin.ne.jp/~m_nacht/1000wind/1000wind2.html

（作製・管理：月夜堂さん）

◎原詩の載っているページ：

ちびまるの宅急便

<http://apple-d.tsukaeru.jp/>

から、対訳 千の風 A THOUSAND WINDS

<http://apple-d.tsukaeru.jp/poem/page3.html>

他、多数

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

<日本たまご事情>鳥インフルエンザ 中国 ヴェトナム タイ で再発

ここ数週間、中国 ヴェトナム タイ での鳥インフルエンザN5N1再発は注意を要する。この地域は、年初（2004）その大流行があり、この地域だけでラフな数字であるが1億羽の家禽類が死亡あるいは殺処分され、24名の人々が亡くなっている。いずれの国も今年の四月前後に鳥インフルエンザの終息宣言をしたばかりである。

同地域に7月に入ってから鳥インフルエンザN5N1タイプがほとんど同時期に再発したことは不気味である。しかも感染が日々拡大している。こうなると、もうこの地域はN5N1が常在している状態と考えたほうが自然である。鳥インフルエンザは秋から冬にかけての病気と考えられていたが、こうなると時期に関係なしとなる。

タイの最大の鶏肉輸出企業のCPグループのトップはたまたまタイ政府に鳥インフルエンザワクチンの使用許可を申し出た。タイでは小規模養鶏農家のみワクチンが許可されているが、大規模輸出企業にはそれを許可していない。ワクチン使用は輸出に不利であり、衛生対策で企業はそれを乗り切れると考えていたが、事態はそれを超えて悪い状態になっているようだ。

この冬これ等のN5N1常在国から日本へ渡り鳥が数多くやってくる。これらの国々との物流、人の行き来もますます多くなっている。日本だけがN5N1フリーでいられるわけが無い。N5N1が出たら殺して穴に埋める方式、根絶作戦はいずれ機能しなくなる、1億羽殺してもそれを根絶できなかったのだから。

国に業界が一致してワクチンによる防御作戦を要望しているのはそう言う訳です。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

<弱視の人に明るい情報>大活字に助けられて

私は、眼底出血で弱視になり、パソコンも辞め、落ち込んでいた。新聞も詳しく読めない、小説などとてもと諦めていた。

毎日新聞7・15、「ひと」欄に「見えない、見えにくいひとの応援します大活字」社長というのがあった。

* 「ひと」欄バックナンバー

<http://www.mainichi-msn.co.jp/column/hito/archive/>

(の[7月15日 市橋正光さん=弱視の人を応援する「大活字」社長]をクリック)

近くの町の図書館で、浅田次郎『鉄道員*ラブ・レター』という大活字本を読んだ。文字の大きさが22ポイントのゴシック体でルーペなしで読めた。

久しぶりの小説に感動した。大げさに言うと諦めていた人生の生き甲斐を見つけた。高齢者の多くが眼病に悩まされる。白内障、緑内障、眼底出血など避けられない障害にお助けが出来たのだ。

さっそく最寄りの図書館に『剣客商売』をリクエストした。

以下で刊行物案内も送ってくれる。

問い合わせ：株式会社「大活字」03-5282-4361

ファクス03-5282-4362

E-mail cafe@daikatsuji.co.jp

大活字カフェ (大活字本だけでなく、各種お助け便利用具の紹介もある)

<http://www.daikatsuji.co.jp/>

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

<農文協ニュース> 「田舎の本屋さん」 がリニューアル (2004/7/22)

★ネット書店「田舎の本屋さん」 全面改装しました。

<http://shop.ruralnet.or.jp/>

たべもの・農業・食育関連など本を探して注文しやすくしました。農業書センターオリジナルの「一般書店で売っていない農業書リスト」の本も注文しやすくなりました。

「朝日新聞」や「日本農業新聞」などに出した広告を掲載して、広告の本を確認の上、注文できるようにしました。

ほかに「田舎の本屋さん」通信のバックナンバーや農文協のニュースなども収録してまいります。

無料メルマガ「田舎の本屋さん」通信

<http://booknews.ruralnet.or.jp/?catid=4&blogid=1>

も月3回発行します。是非、ご登録ください。

<http://books.ruralnet.or.jp/questionnaire.htm>

読者の方でもイベントや「田舎の本屋さん」のお仲間に伝えたいことや知りたいことがあれば、お知らせください。

事務局で判断させていただきますが、通信に掲載させていただきます。

◇ 「「田舎の本屋さん」」 改装記念プレゼント ◇

★書籍ご注文の際に、ご意見をお書きください。

ご注文+ご感想をいただいた方の中から5名様にプレゼント。

プレゼントは『遊びながら食を学ぶすくすくカルタ』

応募締め切り 7月31日

事務局：社団法人 農山漁村文化協会

ルーラル・ブックサービスセンター (RBC)

〒107-8668 東京都港区赤坂 7-6-1 TEL 03-3585-1141 FAX 03-3589-1387

shop@mail.ruralnet.or.jp

<農文協図書館情報> (7/29 更新予定)

◆2004.6.1～6.30 登録の新規収蔵図書

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/01new.html>

◆話題の図書：

『図解 これならできる山づくり 人工林再生の新しいやり方』

鋸谷茂・大内正伸 著 イラスト：大内正伸

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai022.html>

2003年12月25日 農山漁村文化協会 発行

日本の山が膨大に抱えるスギやヒノキの人工林。里山人気の陰で荒廃する一方の山を気軽に再生し、楽に管理していくノウハウを紹介。森林ボランティアなど山仕事の経験のない人にもできる新しい山のつくり方マニュアル

鋸谷茂氏は第29回(2004) 山崎記念農業賞 受賞

・目次

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai022m.html>

◆寺尾五郎文庫

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/090teraobunko.html>

・目録その3 (その5まで順次公開してまいります)

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/list/090terao/tg40/01.html>

*個人文庫は館内閲覧・コピー・FAX サービスのみ利用可能です。

農文協図書館 IT担当 原田太郎

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/>

<編集後記・同人の近況報告> (7月15日～7月28日)

今年の春から長男が小学校に通いだした。それまで好き嫌いが激しかったので、

学校給食についていけるかなどと心配していたが、はじってみると、それは取り越し苦労であることがすぐにわかった。好き嫌いどころか、多くの場合、おかわりまでしているという。給食のメニューがすぐれているのか、雰囲気そうさせるのか。どうも両方らしいのだが、小学校に通っている間、彼が1000食以上の給食を食べることだけは間違いない。「あなたがなにを食べているかわかればあなたがどんな人かわかる」といったような言葉がある。これが正しいとすれば、小学生である彼の人柄・人格を決定する小さくない要素が学校給食ということになる。先週から夏休みになり、家での食事だけになっているが、それが彼にとってよい方向に作用するのか、それともそうでないのか。考えるときりがないが、あれやこれや考えるよりも、一緒に食卓を囲む回数をふやすことのほうが大事かもしれない。(山崎農業研究所会員・田口 均)

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。
- 5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 140号の締め切りは8月16日、発行は8月19日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしく願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 139 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2004.07.29（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

***** ここまで『電子耕』 *****